HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	11.特別寄稿 : 卒業生が振り返るピアサポート室 ピアサポートという自然な治療の場
Author(s)	加藤, 咲
Citation	北海道大学ピアサポート活動報告書（平成28年度版）p.63
Issue Date	2017-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/65087
Type	report
File Information	11HokudaiPeerSupport_H28.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

11. 特別寄稿：卒業生が振り返るピアサポート室

―ピアサポートという自然な治療の場―

加藤咲[1]

わたしは，大学の 3 年間をピアサポート室に関わって過ごした。このように卒業後も報告書に文章を寄せないかと声をかけていただけたこと、とても嬉しく思う。

思い返してみると，大学にはたくさんの方がいた。夢を抱いて懸命に努力を積み重ねる眩しくも周りに敬遠されてしまう方，好きなことに出会って没頭し日々依存を強めていく方，当たり障りなくそつなくこなしつつもどこか物足りなさそうな顔をしている方，人との出会いやつながりに重きを置いてコミュニティを意欲的に拡げつつも深いつながりが持てず自信のなさそうな方，感情の制御を苦手として攻撃性を他者に向けてしまう方，繊細な感受性で人のことを大切にするあまり泣いて崩れてしまう方。にぎやかさも静かさも同居していたが，誇るべき北海道大学の敷地の広さがぎゅっとした同期集団のつながりをも拡散させてしまっているようにも思われた。

その拡散した集団を，構成する人々の比率をそのままにひとつの部屋におさめてしまえる。全く別々の集団に属して関わることもなかったような人たちが同じ場所で別々のことをし，別々の会話をしながら，それでいて耳を澄まさなくとも互いの会話が自然と聞こえてきたり，なんとなく互いに意識を向けあってみたり，刺激を与えあってみたりする。それが，ピアサポート室であったのではないかと，振り返ってみた今ではそう思う。

聞くところによると，熟年夫婦というものは，同じ空間で全く別々のことをしながら，それでいてなにか同じ雰囲気を共有し居心地よい時間を過ごすものらしい。そこに流れる雰囲気には，なにか，孤独を癒してくれる，安心を与えてくれる，もう少し頑張ろうと思える，お互いを尊重したいと思える，そんな自然な治療作用のようなものがあるのだと思う。そんな雰囲気をピアサポート室に醸したい。それが，わたしの理想とするピアサポートの形であったと思う。

現在，わたしは非行少年と関わる仕事をしている。施設内で彼女達に働きかけを続け，そして，一定の期間を過ぎるとまた彼女達を地域社会に返していく。日々関わる中で思い入れも強くなり，幸せになってほしい，二度と非行に走らないでほしいと思う少年をこれからずっと守ってくれるのは，やはり地域社会であり，その社会がピアサポート的な温かさを持っていて，癒しであり，かつ，治療の場であり続けてくれたらいいと，強く願う。

多様性を包み込む懐の広さをもっている場所こそが，ピアサポートの空間であると思う。今後，よりいっそうピアサポート室が大学生の居場所になるよう，心より応援しております。

---

[1] 平成 27 年度ピアサポート室副代表、法務省矯正局